

# 妙安寺だより

No. 196号



古来より、人々は、太陽の軌跡を人生になぞらえてきました。朝日が昇る東の方角に命の誕生を見つめ、夕日が沈む西の方角に命の終わりを感じてきました（現代でも人生の終わりを「晩年」と表現するのも、この考え方の流れと言えます）。

仏教は、その太陽が沈む先に西方浄土と言われる仏様の世界（彼岸）があると説き、自らのいのちも彼岸に帰していくいのちであることを受けとめつつ、限りある人生の「今」を見直す期間と定めたのが、春秋の彼岸であります。どの時代においても、私達の生活に完璧はありません。だからこそ、先人たちは、いのちの在り方を説く仏法からその都度その都度の「今」の生活を見直してきたのです。お寺参りやお墓参りをとおして、自らの生活を、自身の人生観や価値観を見直すご縁としていきましょう。

例年3月末には、しだれ桜や参道の桜が見ごろを迎えます。お花見も兼ねてご参拝下さい。

## 【春季彼岸会のご案内 本堂でお待ちしております】

3月17日（火）14時から、21日（土）11時から  
20日（金）①11時から、②14時から

## 【おみがきのお手伝い】

3月8日（日）13時より

担当地区の大歩、若林 中村組の皆様、よろしく申し上げます。  
有志の方も、是非、ご参加ください。



# 聖徳太子講

4月5日（日）10時 勤行（太子堂）

勤行後、法話（本堂）



## 『花まつり』ってなに？

「花まつり」は、お釈迦さまの誕生をお祝いする行事です。

お釈迦さまは、今から2500年前、ルンビニーという花園でお生まれになりました。お釈迦さまが生まれた4月8日は、そのお誕生をお祝いするかのようになり、園は花が咲き誇っていたと伝えられています。そのため、花まつりでは、花で飾った花御堂はなみどうのなかにお釈迦さまの

像（誕生仏）を安置してお祝いします。また、甘茶をかけるのは、お釈迦さまの誕生された時に甘い雨が降ったとの伝承から行われるようになりました（乾いた心に仏の教えが降り注ぐことの比喻です）。

妙安寺でも、お彼岸期間中から本堂に花御堂を安置しています。お釈迦様の誕生をお祝いして、手を合わせのご縁を結んでくださっていることを慶びましょう。

お墓参りなどで参拝の折には、本堂に入って花御堂へもお参りください。



## 連載「仏教のおしえ = 十二光（じゅうにこう） =」

今月も『正信偈』にある「清浄しょうじょう歎喜くわんぎ智慧光ちえこう 不断難思無称光ふだんなんしむしょうこう」の仏様の光の具体的なはたらきを表す12の光の7つ目「歎喜光くわんぎこう」を紹介します。

前回の「清浄光」でお話をした「欲に染まり切っていることを、また貪りの一途を辿っている事実を照らし出す仏の光を仰ぎ続ける歩み」を喜びと受け止められるはたらきを「歎喜光」と表現しています。

親鸞聖人は「牛・羊の眼は迷いやすし」と言われています。これは、牛や羊は鼻先しか見えていないと言われ、目先の事のみ執着している欲に染まり切った人間の状態を牛や羊の狭い視野に例えたお言葉です。



浄土真宗の「さとり」は、「覚り」と書きます。これは、「目を覚ます」という意味です。欲に翻弄され、目先の事しか見えなくなっている状態から目を覚ますということです。「恋は盲目」とはよく言ったもので、なかなか、そのような状態になっていると我が身を客観的に見つめることはできません。だからこそ、目が覚めるきっかけを持つことが大事であると仏教は説いているのです。その具体的なきっかけの一つが、ご自宅での毎日のお内仏へのお参りであったり、お寺やお墓への参拝なのです。

仏の光を仰ぎ続ける歩みとは、この目が覚めるきっかけを頂く生活を営むことです。この生活を営むことができる、その当たり前を有り難いと喜びに感じさせていただくはたらきを「歎喜光」と表現しているのです。

### 【第8回 妙安寺手作り市】

日 時 2026年4月26日（日）

11時から15時まで

ブース数 内外あわせて40ブース以上

出店内容等の詳細は別紙の  
チラシを見てください！



